

# 渡来人（帰化人）の東国移配と高麗郡・新羅郡

荒井 秀規

## はじめに

日本古代の渡来人というと、たとえば高等学校の日本史の教科書に「朝鮮半島との交流が盛んになるなかで、渡来人によって新しい文化や鉄器・須恵器の生産、機織り・金属工芸や土木などの技術が伝えられた」（『新日本史 改訂版』山川出版、二〇〇七年検定。「倭の五王」項）、「高い技術や文筆能力を持つ渡来人は、伴造や部に組織された」（同、「国造制と氏の成立」項）、あるいは「5世紀には朝鮮との交流がさかんになったため、朝鮮から日本に渡来する人々が増えた。これら渡来人は、機織・金属工芸・製陶・土木工事などの新しい技術や、馬の飼育、乗馬の法などを伝えた。文字の知識も渡来人によってもたらされた」（『日本史B 新訂版』実教出版、二〇〇七年検定。「新しい技術と渡来人」項）とあるように、大化前代において優れた技術・新たな文化の伝来という視点で語られるのが専らであって、その一方、「大化改新」以後、特に百濟・高句麗滅亡に前後して日本列島に流入した亡命型、難民型の渡来人が、教科書その他に取り上げられることは多くはない。

本稿は、今回のシンポジウムの狙いである「古代東ユーラシア地域と朝鮮半島・日本列島に焦点を当て、多角的視野からこれらの地域における人々の流動と土着化を検討すること」に照らして、七世紀後半以後律令制下初期の、亡命貴族でもなければ、技術者でも文化人でもない、普通のそしておおかたの難民型渡来人の東国移配と、彼らを以て東国に建郡された高麗郡と新羅郡について、当日の口頭報告をまとめ直したものである。

なお、報告タイトルで「渡来人」に「(帰化人)」を付したのは、無定見に行われている「帰化人」という歴史学用語排斥、「渡来人」への書き換えに懐疑的であるからに他ならないが、それは、歴史学用語としての「渡来人」を否定するということではない。議論の詳細は別稿その他に譲るが<sup>(1)</sup>、本稿との関係で私見を整理しておけば、「渡来人」は日本の古代国家成立の前後を通じて日本列島以外から「渡来した男女本人、およびその男系子孫」となる。したがって、あとで取りあげる高麗福信のように日本生まれの渡来人（渡来二世・三世など）も多く存在する一方で、母が渡来人でも父が倭人ならば渡来人とならないことに留意しておきたい。

これに対して、「帰化人」は、古代国家成立後の日本列島に渡来した人々のうちで望むと望ま

ざるとを問わず日本国（倭国）に帰化した人（狭義）のほか、ヤマト王権～律令国家に服属した南島人（奄美大島）や蝦夷（俘囚含む）をも含む（広義）<sup>(2)</sup>。以下、本稿では「渡来人」を使うことにするが、その主体は狭義の「帰化人」のなかで、特に七世紀後半以降の難民型の「渡来人」である。律令制下に、難民型の「渡来人」のうちの渡来一世の男性は計帳（大帳）に「帰化」と集計されて<sup>(3)</sup>、賦役令没落外蕃条によって十年間の課役が免除（百済・高句麗滅亡時の難民は終身免除）されている。

## 1、渡来人の郡

【表 1】渡来人の郡

郡	国	建郡年	内 容	構 成	関連氏族	社 寺	備 考
百済郡 Ⅰ	摂 津	天智三年？ 664	白村江の敗戦後、百済王族の余善光（兄豊璋、父義慈王）を難波に配置 ⇒ヤマト王権内に百済王権を創出	3 郷（東部・西部・南部）	百済王家	式内社なし 百済寺・百済尼寺	長屋王木簡に見える
多胡郡 Ⅱ	上 野	和銅四年 711	甘良郡など三郡より三〇〇戸で分郡 従来よりの渡来人居住地を集約。 全郡渡来人とは限らないか？	6 郷（織裳・韓級・矢田ほか）	羊多胡吉志 吉井連	式内社なし 馬庭東遺跡？	多胡碑 天平13年調庸布
席田郡 Ⅲ	美 濃	霊亀元年 715	尾張国の新羅人（旧加耶）ほかの美濃国への再配置、旧本巣郡の狭小な条里地域	74家＋ $\alpha$ 4 郷（美和・磯部・那珂・名太）	席田君 賀羅造	式内社なし 席田廃寺	長岡京木簡に見える
高麗郡 Ⅳ	武 蔵	霊亀二年 716	東国の高句麗人難民の再配置、旧入間郡のうち。高句麗滅亡時に渡来した高麗福信の先祖以来の高句麗人居住地	$\alpha$ ＋1799人 高麗郷・上総郷	肖奈⇒高麗朝臣⇒高倉朝臣 高麗王若光	式内社なし 女影廃寺 高岡廃寺 大寺廃寺	武蔵国分寺 瓦銘「高」
新羅郡（新座） Ⅴ	武 蔵	天平宝字二年 758	帰化新羅人の移配、旧入間郡または豊嶋郡の「閑地」。天平宝字四年の帰化新羅人141人の武蔵国移配も新羅郡カ 宝亀11年（780）5月以後に新座郡へ改称	$\alpha$ ＋74人＋141人 志木（志楽）郷・余戸	沙良真熊 広岡造	式内社なし	武蔵国分寺 瓦銘なし
（参考） 巨麻郡 Ⅵ	甲 斐	不明 7世紀後半？	高句麗人の配置、初見は天平勝宝期の調庸布銘の「（甲斐）国巨麻郡青沼郷物部高嶋調老匹」、天平宝字五年（七六一）十二月の甲斐国司解（『大日本古文書』四）の「巨麻郡栗原郷」	9 郷（等力・速見・栗原・青沼・真衣・大井・市川・川合・余戸）	壬生直	式内社5 社 倭文神社ほか	高麗でなく駒に基づくとする説あり

### I 『日本書紀』天智天皇三年（六六四）三月条

百済王善光王等を以て、難波に居らしむ。

### II 『続日本紀』和銅四年（七一一）三月辛亥（六日）条

上野国甘良郡織裳・韓級・矢田・大家、緑野郡武美、片岡郡山〔部〕等六郷を割きて、別けて多胡郡を置く。

#### 多胡碑

弁官符上野國片罡郡緑野郡甘／良郡并三郡内三百戸郡成給羊／成多胡郡和銅四年三月九日甲寅／宣左中弁正五位下多治比真人／太政官二品穂積親王左大臣正二／位石上尊右大臣正二位

〈20〉 渡来人（帰化人）の東国移配と高麗郡・新羅郡（荒井）

藤原尊

III『続日本紀』靈龜元年（七一五）七月丙午（二十七日）条

尾張国人外徙八位上席田君迹近及び新羅人七十四家を美濃国に貫し、始めて席田郡<sup>むしろだ</sup>を建てる。

参考『続日本紀』天平宝字二年（七五八）十月丁卯（二十八日）条

美濃国席田郡の大領外正七位上子人・中衛无位吾志等言さく。子人等の六世の祖父<sup>オ ル フ シ チ</sup>乎留和斯知、賀羅国より化を慕ひて来朝す。当時風俗未だ練れず、姓字を著けず。望むらくは国号に随ひて、姓字を蒙の賜はらんことを。姓賀羅造を賜ふ。

IV『続日本紀』靈龜二年（七一六）五月辛卯（十六日）条

駿河・甲斐・相摸・上総・下総・常陸・下野七国の高麗人千七百九十九人を以て、武蔵国に遷し、始めて高麗郡を置く。

V『続日本紀』天平宝字二年（七五八）八月癸亥（二十四日）条

帰化の新羅僧州二人・尼二人・男十九人・女廿一人、武蔵国の閑地に移す。是に、始めて新羅郡を置く。

VI『日本後紀』延暦十八年（七九九）十二月甲戌（五日）条

甲斐国の人、止弥若虫<sup>とみ</sup>・久信耳鷹長等<sup>くしじ</sup>一百九十人言さく。己等の先祖は、元是れ百済人なり。聖朝を仰慕し、航海して投化す。即ち天朝綸旨を降して、摂津職に安置す。後、丙寅歳（天智五年）正月廿七日格に依りて。更めて甲斐国に遷す。自尔以来。年序既に久し。伏して去る天平勝宝九歳（757）四月四日の勅を奉るに稱はく。其れ高麗・百済・新羅人等、遠く聖化を慕ひて、我が俗に來附し、改姓を情願るは、悉く之を聴許す。而るに己等の先祖は、未だ蕃姓を改めず。伏して請ふらくは、改姓を蒙らむことを者。若虫に姓石川、鷹長等に姓広石野を賜ふ。

渡來人を以て建郡された郡は、【表1】の例があり、その関連史料がI～VI（原漢文）である。ただし、甲斐国巨麻郡は、コマすなわち高句麗人との関係よりも、牧すなわち駒との関係に基づくとする説もあり、飛び地が想定されているなど構成する郷に複雑な要素があること、かつ式内社の存在が他例と異なることなどあるので、ここでは参考とするに留める。

渡來人と式内社の関係については定見はないようであるが、『古語拾遺』に、

輕嶋の豊明朝[応神朝]に至りて、百済王、博士王仁<sup>わに</sup>を貢る。是れ河内<sup>かわち</sup>文首<sup>ふみのおびと</sup>の始<sup>はじめ</sup>祖<sup>のおや</sup>なり。秦公<sup>おや</sup>の祖弓月、百二十県<sup>あやのあたひ</sup>の民を率て帰化<sup>まゐもふ</sup>けり。漢<sup>あち</sup>直<sup>の</sup>が祖阿知使主<sup>おみ</sup>、十七県<sup>まゐけ</sup>の民を率い來朝<sup>よろづ</sup>り。秦・漢・百済の内附せる民、各、万<sup>かぞ</sup>を以て計ふ。褒賞<sup>ほ</sup>むべきに足る。皆、其の祠有れども、未だ幣の例に預らざるなり。

とあるように、祈年祭に奉幣を受ける官社（後の式内社）があること、つまりは日本の律令的祭祀形態と、七世紀後半以降に渡來人を以て建郡された郡における渡來人による祭祀とは異質であったと考えられる<sup>(4)</sup>。巨麻郡以外の各郡に式内社がないのもこの意味で理解すべきであり、逆に式内社が五社もある巨麻郡の祭祀形態は新來の渡來人の祭祀形態とは異なるのであって、同郡と渡來人の関係は検討の余地がある。

また、上野国多胡郡は、多胡碑に見える「羊」を無姓の渡來人と考える、構成郷のうちに韓級

郷がある、郡名は胡人が多いの意味あるいは渡来系氏族の多胡吉志氏に因む可能性がある、『続日本紀』天平神護二年（七六六）五月壬戌（八日）条に「上野国の新羅人子午足等一百九十三人に姓吉井連を賜ふ」とあるのは吉井の地名のある多胡郡に関連すると考えられる、などから渡来人の郡とされるのが一般的であるが、渡来系に限らないとする説もある。

さて、巨麻郡と多胡郡以外で留意されるのは、Ⅰ百済郡、Ⅳ高麗郡、Ⅴ新羅郡の朝鮮三国の国名を帯びた三郡である。このうち、百済郡は畿内に設置された郡で、その主たる構成人員は百済王家を中心とする亡命王族・貴族層であった。残る高麗郡と新羅郡が、本稿が取りあげる東国に移配された難民型渡来人の郡である。

さて、七世紀後半の朝鮮半島の動乱と渡来人の動向は【表2】の如くで、百済人も東国に配されている。『日本書紀』天智天皇五年（六六六）是冬条に「百済男女二千余人を以て東国に居く。凡そ縹ほふしと素しろをぬ（俗人）とをえらばず。癸亥年より起こして三歳に至るまで並びに官食を賜ふ」とある。癸亥年は天智天皇二年（六六三）、すなわち白村江の敗北の年から三年間官食を給与していたが、ここに至って東国に移配して自活を促したのである。後の養老戸令の没落外蕃条に次のようにある渡来人の寛国安置の早い例であり、以後『日本書紀』に渡来人の東国安置が散見する。

凡そ外蕃に没落して還ることを得たらむ、及び化外けがわの人化けに帰らば、所在の国郡、衣糧給へ。状を具にして飛駁へいさく発てて申奏せよ。化外の人をば、寛なる国に貫に附けて安置せよ。没落の人は旧の貫に依れ。旧の貫無くは、任に近親に貫に附けよ。並に糧給ひて通送し、前所に達せしめよ。

なお、この戸令没落外蕃条は大宝令文では、「前所に達せしめよ」に続けて、「若し才伎有らば、奏聞して勅を聴け」とある。すなわち、大宝令（及び飛鳥浄御原令）では渡来人の才能に期待し活用を計る方針があったが、養老令では単に難民として処理するが故にその文言が削られている。日本国政府の難民型渡来人に対する姿勢が、露見する例である。

さて、『日本書紀』に載らない渡来人の東国安置も多かった。『日本後紀』延暦十八年（七九九）十二月甲戌（五日）条（史料Ⅵ）によれば、甲斐国人の止彌若虫・久信耳鷹長ら百九十人は「己等の先祖は、元是れ百済人なり。聖朝を仰ぎ慕ひて、海を航りて投化す。即ち天朝綸旨を降して、摂津職に安置し、後、丙寅歳正月廿七日格に依て、甲斐国に更めて遷す」と自らの出自を語っている。「丙寅歳」は天智天皇五年（六六六）であり、先の『日本書紀』の百済人の東国安置記事と年紀は一致するが、『日本書紀』では是冬条とあるから、春となる正月廿七日格とは合致しない。一方、『日本書紀』天智天皇四年（六六五）二月是月条に「是月。百済国の官位の階級を勘校し、仍て佐平福信の功を以て、鬼室集斯に小錦下を授く〈其れ本位は達率〉。復、百済の百姓男女四百余人を以て近江国神前郡に居く」とあり、ここでは百済人が摂津国ではなく近江国に置かれている。すなわち、百済国からの亡命貴族を叙位する一方で、難民は当初近江国や摂津国ほかに配置したが、三年を過ぎて、甲斐国ほか東国に移配させたということである。その後も、天武天皇十三年（六八四）には、百済人の僧尼・俗人男女二十三人を武蔵国に安置しているし、持統天皇二年（六八八）には、百済の敬須徳那利を甲斐国へ遷している（表2参照）。これらのように百済人も東国に安置されたのであるが、摂津国の百済郡のような一郡は東国では置かれなかった。

では、以下、東国の高句麗人（高麗人）と高麗郡、新羅人と新羅郡についてみてみよう。

【表2】東国の渡来人（出典は『日本書紀』・『続日本紀』）

660	斉明 6 年	百濟滅亡
661	斉明 7 年	百濟救援のため新羅へ出兵する。献上された唐俘106人を近江国に居く
663	天智 2 年（癸亥年）	白村江の戦い
664	天智 3 年	百濟王善光王等を難波に居く………百濟郡設置か
665	天智 4 年	百濟百姓男女400余人を近江国神前郡に居き、墾田を賜う
666	天智 5 年正月 (丙寅年) 10月 是冬	摂津に安置した百濟人を甲斐国へ遷す（『日本後紀』） 高麗使若光ら来日 白村江の敗戦で渡来した百濟人男女2000余人を東国に居く。癸亥年より三年官食を給していた
668	天智 7 年	高句麗滅亡
669	天智 8 年は歳	百濟王族の余自信・鬼室集斯ほか男女700余人を近江国蒲生郡に遷し居く
670	天智 9 年	庚午年籍制定 「帰化」難民の十年間の課役免、この時始まる？
675	天武 4 年10月	唐人30人を遠江国に安置する
681	天武10年 8 月	課丁年齢に達した「帰化」難民も、十年間は課役免とする
684	天武13年 5 月	「化来」した百濟の僧尼・俗人男女23人を武蔵国に安置する
685	天武14年 2 月	大唐人・百濟人・高麗人、並びに147人に爵位を賜う
686	朱鳥元年閏12月	大宰府が高麗・百濟・新羅の百姓男女と僧尼62人を献ず
687	持統元年 3 月 4 月	「投化」した高麗人56人を常陸国に居き、田と稟を給す 「投化」した新羅人14人を下野国に居き、田と稟を給す
688	持統 2 年 5 月	「投化」した新羅の僧尼・百姓男女22人を武蔵国に居き、田と稟を給す
689	持統 3 年 4 月	百濟の敬須徳那利を甲斐国へ遷す（流刑？）
690	持統 4 年 2 月 2 月 8 月	「投化」した新羅人を下野国に居く <u>6 月飛鳥浄御原令施行</u> 新羅の僧・官人ら50人「帰化」する。 「帰化」した新羅の官人の韓奈末許満ら12人を武蔵国に居く 「帰化」した新羅人を下野国に居く
701	大宝元年 6 月	<u>大宝令施行</u>
703	大宝 3 年 4 月 5 月	従五位下高麗若光に <sup>こにきし</sup> 王 の姓を賜ふ 「流来新羅人」を新羅使に附して帰国させる
709	和銅 2 年	高麗福信、武蔵国入間郡内で生まれる
711	和銅 4 年 3 月	上野国に多胡郡を建郡する（→多胡碑）
715	霊龜元年 7 月	尾張国人席田君迹近と新羅人74家を美濃国に貫し、席田郡を建てる
716	霊龜 2 年 5 月	駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野国の高麗人1799人を遷し、武蔵国に高麗郡を置く
717	霊龜 3 年11月	高句麗・百濟滅亡の際の難民の課役を終身免除とし、以外は十年間の免除であることを確認する
718	養老 2 年～	<u>養老令の編纂開始</u>
733	天平 5 年 6 月	武蔵国埼玉郡の新羅人徳師ら男女53人、請により金姓を下賜する
756	天平勝宝 8 年	高麗朝臣福信、武蔵守となる（紫微少弼の兼官、法隆寺献物帳）
757	天平宝字元年 4 月	帰化人の和姓への改姓を促進させる <u>5 月養老令施行</u>
758	天平宝字 2 年 8 月	「帰化」した新羅僧32人・尼2人・男19人・女21人を武蔵国の閑地に移し、新羅郡を置く
760	天平宝字 4 年 4 月	「帰化」した新羅人131人を武蔵国に置く
761	天平宝字 5 年正月	美濃・武蔵国の少年各20人に、新羅征討計画の一環として新羅語を習わせる
766	天平神護 2 年 5 月	上野国の新羅人子午足ら193人に吉井連を賜姓する

## 2、高麗郡建郡をめぐる

高麗郡の建郡を語るのは、前掲史料Ⅳである。霊龜二年（七一六）に、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七国の高麗人千七百九十九人で武蔵国に高麗郡が建郡された。郡域としては入間郡の中央西部を割いたもので、現在の埼玉県日高市と飯能市の一部であるが<sup>(5)</sup>、建郡の時点では、先行する上野国多胡郡（史料Ⅱ）が三郡内の三百戸を以て建郡したのと同様に領域というよりも人口構成そのものが郡であった。『和名類聚抄』によれば、高麗郡は高麗郷（日高市高





麗本郷付近)と上総郷(飯能市北東部)の二郷で構成される小郡で、移住してきた七国の高句麗人では上総国の高句麗人が多かったであろう。

郡家の所在が不確定など諸問題があるが、本稿での課題は、その建郡理由である。なぜ、霊亀二年(七一六)になって、高麗郡が東国の高句麗人を集める形で武蔵国に建郡されたのであろうか。

従来から指摘されているのは主に次の①～③である。

①隔離策 高句麗人を一箇所に隔離し支配した。

②融和・優遇策 高句麗一国の人(含む在日二・三世)だけで、地域区画の形成と支

配を認めた<sup>(6)</sup>。

③開発促進策 渡来人の先進的な技術による土地開墾を目的とした。

③は渡来人の技術を武蔵国の閑地に集中させたという考え方で、近時でも高橋一夫氏が「どうしてこの地に高麗郡が建郡されたの」<sup>(7)</sup>と題して、この立場を採っている。日高市・飯能市では、縄文時代の遺跡は多いが、弥生時代は皆無、そして古墳時代はほとんどないが、奈良時代に再び遺跡が急増し、小河川沿いに水田開発が進められたことを、高麗郡建郡、高句麗人の入植によるもので、地方行政機構のモデルを示すとしている。また、狭山市遺跡調査会の『狭山市遺跡調査会報告書』に共通する「遺跡の立地と環境」の項では、狭山市内の集落形成の契機を高麗郡の建郡としている。渡来人の高度な技術で未開発地域の開墾を進めようとする中央政府の意図によって東海道・東山道に分散していた渡来人が集められて建郡されたのが高麗郡で、高句麗人がもたらした技術は主に窯業技術と鉄製品生産技術で、その一端を東金子窯跡群(入間市)の操業開始に求めている。

また、少し視点の変わったものとして、加藤かな子氏は<sup>(8)</sup>、④北武蔵地域の支配強化策のための建郡としている。すなわち、大化前代からの反畿内的性格を持ち在地性が強い北武蔵に対して、南武蔵に近い入間郡に東国各地の高句麗人を移住、開拓させ、畿内的な南武蔵との交流を図ることで、両者間の境界をなくして国司の北武蔵に対する監督をしやすくしたとする。また、北武蔵に寺院が増加するのは北武蔵の豪族が政府のそのような交流策を受け入れた見返りとも指摘している。

これらの諸説に対して、本稿が取りあげたいのが、⑤外交政策としての高麗郡の建郡である。

すなわち、田中史生氏は<sup>(9)</sup>、国家構造として諸蕃・夷狄を必要とする日本型中華思想(小中華主義)の立場から、国内に百済王・高麗王を創世し、百済・高句麗を王権(化内)に取り込んだのが百済郡・高麗郡の建郡であったとする。

百濟王家・百濟郡については前掲史料Ⅰであるが<sup>(10)</sup>、高麗王家については、次の二つの『日本書紀』記事がある。

『日本書紀』天智天皇五年（六六六）十月己未（二十六日）条

高麗、臣乙相奄鄒等を遣わして、調を進るく大使乙相奄鄒・副使達相通・二位玄武若光等。

『続日本紀』大宝三年（七〇三）四月乙未（三日）条

従五位下高麗若光に王の姓を賜ふ。

すなわち、天智天皇五年（六六六）に高句麗の貢調使として渡来した使者のうち二位玄武若光が、そのまま日本に帰化して、大宝三年（七〇三）にはすでに従五位下とされていたが、加えて高麗王姓を賜姓されている。

一方、宮瀧交二氏は<sup>(11)</sup>、同じく日本型中華思想の立場から、高句麗を従えているという対唐向けのアピールとして高麗郡を建郡したとする。そして、なぜ武蔵国に高麗郡が建てられたか、ということについては、建郡の霊亀二年（七一六）以前に、高麗福信や高麗王若光が入間郡に住んでいたからであるとするが、それを遡って福信の先祖や若光が渡来後になぜ入間郡を居住地としたかは不明としている。

若光に関しては、日高市高麗神社に伝わる宮司家系図の『高麗氏系図』に次のようにあり、若光は高麗郡の地で死去したとされている。

#### 『高麗氏系図』

〔前欠、原漢文〕

之に因り、従ひ来たる貴賤相集い、屍を城外に埋め、且、神国の例に依り、霊廟を御殿の後の山に建て、高麗明神と崇める。郡中に凶事あれば、則ち之に祈るなり。長子家重世を継ぐなり。天平勝宝三辛卯。僧勝樂寂す。弘仁、其の弟子聖雲と同じうして、遺骨を納め、一字を草創し、勝樂寺と云ふ。聖雲は若光の三子なり。

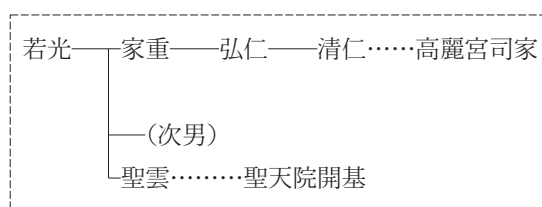
高麗家重 天平二十戊子正月十七日卒

同 弘仁 天平宝字四庚子九月七日卒

同 清仁 弘仁子母新民女

延暦十六年三月十日

（以下略）



また、高麗福信（高倉福信）が高麗郡で生まれたことは、次に掲げる『続日本紀』のその薨伝に「福信は武蔵国高麗郡の人なり」とある。すなわち、福信は、高句麗が唐・新羅連合に滅ぼされた天智天皇七年（六六八）前後に日本に渡来した肖奈福德の孫で、和銅二年（七〇九）に武蔵国高麗郡で生まれている。当時、高麗郡はまだ建郡されていないから、これは後に高麗郡となる地を含む入間郡の地で生まれたということである。

『続日本紀』延暦八年（七八九）十月戊寅（十七日）条

散位従三位高倉朝臣福信薨ず。福信は武蔵国高麗郡の人なり。本姓は肖奈。其の祖福德は唐将李勣の平壤城を抜くに属りて、国家に帰し、武蔵に居する。福信は即ち福德の孫なり。

小年にして、伯父肖奈行文に随ひて都に入る。時に同輩と晩頭<sup>いそのかみ</sup>に石上<sup>ちまた</sup>の衢<sup>みち</sup>に往き、遊戯して相撲す。巧みに其の力を用ゐ、能く其の敵に勝てり。遂に、内裏に聞こえ、召して、内堅<sup>ないじゆ</sup>所に侍らしむ。是れより名を著わす。初め右衛士大志<sup>だいしかん</sup>に任ぜられ、稍遷りて天平年中に外従五位下を授かり、春宮亮<sup>とうぐうのすけ</sup>に任ぜられる。聖武皇帝甚だ恩幸を加へ、勝宝の初めに、従四位紫微少弼<sup>しびしろうひつ</sup>に至る。本姓を改め、高麗朝臣を賜わり、信部大輔に遷る。神護元年に従三位を授かり、造宮卿<sup>すで</sup>を拝し、兼ねて武蔵・近江守を歴る。宝亀十年に上書して言す。臣、聖化に投じてより年歳已に深し。但し、新姓の榮、朝臣は分に過ぐると雖も、しかるに旧俗の号、高麗をいまだ除かず。伏して乞ふらくは、高麗を改めて以て高倉と為さんことを。詔して之を許す。天応元年、彈正尹<sup>だんじょうのいん</sup>に遷り武蔵守を兼ね。延暦四年、表を上<sup>たてまつ</sup>り、身を乞ひ、散位<sup>さんに</sup>を以て第に帰す。薨ずる時、年八十一なり。

つまり、高麗郡建郡以前にも武蔵国入間郡に高句麗人はいて、そこにさらに近隣七国から高句麗人を集めて建郡されたのが高麗郡であったということになる。

さて、基本的に田中氏・宮瀧氏の理解に従いたいのが、より厳密に言うならば、高麗郡建郡の問題は、（１）「なぜ、建郡されたか」、（２）「なぜ、武蔵国であったか」、（３）「なぜ、霊龜二年であったか」ということである。両氏もこの全てには答えていないので、以下、改めて私見を述べていきたい。

行論の都合上、まず（２）「なぜ、武蔵国であったか」から検討する。なお、先に確認したように『高麗氏系図』によれば若光は高麗郡の地に居住したことになるが、それが高麗郡建郡の前か、建郡と同時に、以後かは不明であり<sup>(12)</sup>、また『高麗氏系図』の史料的性格から<sup>(13)</sup>、ここでは若光の居住については問わない。一方、高麗福信はその薨伝から高麗郡建郡以前の入間郡域で生まれたことは史実とみなせる。そして、福信の父・祖父らがその地に居住したのも、薨伝が言う「其の祖福德は唐将李勣の平壤城を抜くに属りて、国家に帰し、武蔵に居する」とあるのを信じてよからう。

すなわち、福德のほか天智天皇七年（六六八）の高句麗滅亡に前後して日本に渡来した高句麗難民のうちに、直接武蔵国へ、あるいは畿内や近江国において日本社会への順化を経た後に武蔵国へ移配された人々がいた。高句麗人の武蔵国への安置は正史に載らないが、常陸国への例があり（『日本書紀』持統天皇元年三月己卯条）、高麗郡建郡に際して高麗の地に集められた高句麗人は常陸国ほか駿河・甲斐・相摸・上総・下総・下野六国に及んでいる。入間郡内には福信の一族ほか高句麗人がすでに居住している事態が先にあり、そこに高句麗人を集めて建郡されたのが高麗郡であったと言えよう。

入間郡のうちで高麗郡建郡以前に高句麗人が多く居住していたのが、後に高麗郡となる地域か、あるいはそれ以外の非高麗郡域かということになると、すでに触れたように日高市・飯能地域の集落遺跡が増加するのは高麗郡建郡の時期以降であるから、非高麗郡域と考えておいた方が良いでしょう。高麗郡の建郡記事（史料Ⅳ）はそれ以前から武蔵国に居住した高句麗人についてふれていないが<sup>(14)</sup>、福信の一族ほかすでに武蔵国にいた高句麗人も入間郡の中央西部に集められて高麗郡が建郡されたのであって、高麗郡建郡当初の人口は史料Ⅳに見える一千七百九十九人が全てということではなからう<sup>(15)</sup>。



もっとも、高麗郡建郡に際して、東国の全ての高句麗人が新たな高麗郡に集められたわけではないから、東国各地にはその後も高句麗人が居住した地域が残った。逆に言えば、そこになぜ高麗郡が建郡されなかったのか、東国のうちで武蔵国がなぜ建郡の地に選ばれたのか、という問題は依然として残る。この点は、宝亀二年（七七一）に武蔵国を東山道から東海道に編入した際の太政官奏に「武蔵国は山道に属すと雖も、兼ねて海道を承ける。公使繁多にして」（『続日本紀』宝亀二年十月己卯条）とあるように、東国のなかで武蔵国が東山道と東海道の接点の要衝であったこと、それゆえに各国の高句麗人を移住させるのに便利な国であったことがあり、さらには後述する当時の武蔵国守と中央政府との連携があったのである。

次に、（１）「なぜ、建郡されたか」と（３）「なぜ、霊亀二年であったか」は、あわせて述べていきたい。

まず、大宝三年（七〇三）に若光が高麗王の姓を賜ったことは、百済王家の創始と同じく、高麗王家（高句麗王家）を日本国内に創始したものである。この場合に、天智天皇七年（六六八）の高句麗滅亡から間が空くのは、【表３】のように滅亡後も高句麗遺臣の抵抗や新羅が建国した傀儡的な高句麗（報徳国）が存在し、日本国政府はその小高句麗国と交渉があったからで、その高句麗が消滅するのは、天武十三年（六八四）十一月に報徳王に冊封されていた安勝（高句麗最後の王の宝蔵王の庶子）の一派の反乱が、新羅によって鎮圧されて以後、報徳国が史料から見えなくなるのを待たねばならない<sup>(16)</sup>。

この翌年の天武十四年（六八五）二月に「大唐人・百済人・高麗人」百四十七人に爵位を賜っているが、若光もこの頃に叙位されたのであろう。そして、同年九月に前年に高句麗（報徳国）に派遣した最後となる遣使（三輪引田難波麻呂）が帰国する。安勝らの反乱の顛末などの報告を受けた日本国政府はこの段階で朝鮮半島における高句麗王家が完全に消滅したとみなしたのではなかろうか。ところが、文武天皇二年（六九八）になって、高句麗の後身となる渤海国（震国）が建国される。こうしたなか、大宝三年（七〇三）四月に従五位下の官人となっていた若光が高麗王姓を下賜したのは、震国の台頭を前にちょうど同年正月に来日し滞在中の新羅国の使者（閏四月をはさみ五月に帰国）に朝鮮半島内で消滅した高句麗王家を日本国内で復興させたことをアピールするための措置だったのではなかろうか。

なお、天智天皇五年（六六六）に来日した高句麗使のうちで若光より上位の大使<sup>おつそうあむす</sup>乙相奄鄒<sup>だつそうどん</sup>・副使達相遁ではなく若光が高麗王とされている理由は不明であるが、若光は傍系であっても高麗王家の一族であったのではなかろうか。また、天武九年（六八〇）十一月に高麗の使者十九人が帰国しているが、乙相奄鄒と達相遁はこの時に帰国し、若光のみが残留したのであろう。

そして、霊亀二年（七一六）五月という高麗郡建郡の時期であるが、このことに関して注目したいことは、時の武蔵国守が建郡前年の霊亀元年（七一五）五月任官の高句麗系と覚しき大神朝臣狛麻呂であることである。むろん、狛麻呂は壬申の乱の功臣である高市麻呂や安麻呂の弟である大和の豪族三輪氏の本宗家の一人であって渡来人ではないが、その名にコマとあることからすれば、母が高句麗人であったり、養育者が高句麗人であった可能性が高い。そのような国守のもとに高麗郡建郡が行われていることは、偶然ではなかろう。

霊亀元年（七一五）七月に美濃国で新羅人を集めて席田郡が建郡されている（史料Ⅲ）、一方、

東国ではそれに先だつ五月に相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野六国の富民千戸を陸奥国に配している（『続日本紀』）。律令政府はこの時期、東国の民の再配置を大規模に行っていて、高麗郡建郡もその一環として、新羅人を集めた席田郡の建郡に引き続いて行われたものである。こうした政府の意向も含んだうえで、高麗郡建郡の計画が立てられ、狛麻呂が武蔵国守として赴任したのであろう。

【表 3】高句麗滅亡と若光（月の漢数字は倭国の事項。出典は『日本書紀』・『続日本紀』・『三国史記』）

天智七年（668）	9 月	高句麗滅亡 → 福信の祖父が渡来
天智九年（670）	6 月	高句麗遺臣の決起、高句麗再興 宝蔵王の子（ないし外孫）の安勝が王位へ 新羅が援助、復興勢力内紛 安勝が新羅へ亡命
	8 月	新羅 安勝を高句麗王に冊封 ☆以後天智十年～天武十一年に高麗から倭へ 9 回使者派遣（書紀）
天武三年（674）	9 月	新羅 高句麗王安勝を報徳王に冊封
天武八年（679）	九月	倭 高麗（報徳国）に使者派遣？
天武九年（680）	3 月	新羅文武王の妹と安勝の婚姻 安勝は新羅王族化
	十一月	高麗の使者19人帰国→乙相奄鄒らこの時に帰国か？、若光は残留
天武十年（681）	七月	倭 高麗（報徳国）に使者派遣（佐伯広足）
天武十二年（683）	10 月	安勝に新羅の王姓の金姓下賜、蘇判に任官（新羅第 3 位官）、 新羅の都慶州に住ませる
天武十三年（684）	五月	倭 高麗（報徳国）に使者派遣（三輪引田難波麻呂）
	11 月	高句麗残存勢力の反乱と潰滅
天武十四年（685）	二月	大唐人・百濟人・高麗人并せて147人に爵位を賜う→若光含むか
	九月	前年の使者帰国、随行来日した高麗人に禄を賜う
朱鳥元年（686）	潤十二月	筑紫大宰、高麗・百濟・新羅の百姓男女と僧尼62人を献ず
持統元年（687）	三月	「投化高麗五十六人」を常陸国に安置する
文武二年（698）		渤海（震国）の建国
大宝元年（701）	六月	大宝令の施行
大宝三年（703）	四月	従五位下の若光に高麗王姓を下賜する

また、高麗郡が建郡された霊亀二年（七一六）の八月には遣唐使が任命され（多治比県守ほか）、翌養老元年（七一七）に派遣されている。この遣唐使は、日本国内に高麗王家や高麗郡が存在することを唐に通達したと考えられる。それは、唐から一笑に付されたかもしれないが、日本型中華思想の所産にほかならなかった。

かくして、席田郡・高麗郡と、渡来人の郡が置かれたのに続く養老元年（七一七）十一月には、高句麗・百濟滅亡の際の難民の課役（含む雑徭）を終身免除、以外の渡来人（近年の難民、唐・新羅人の難民）は十年間のみ免除とされることになるが、そのことを示すのは、次の二つの史料である。

『続日本紀』養老元年（七一七）十一月甲辰（八日）条

高麗・百濟二国の士卒、本国の乱に遭ひて、聖化に投ず。朝廷、其の絶域を憐れみて、復<sup>おく</sup>を給ひて身を終えしむ。

靈龜三年（七一七）十一月八日太政官符（賦役令『令集解』古記引用）

靈龜三年十一月八日太政官符。外蕃は課役を免す事、高麗・百濟敗れし時投化するものは、終身に至り課役を俱に免す。自余は令の如く施行せよ。

後者で「自余は令の如く施行せよ」とあるのは、次の大宝賦役令の没落外蕃条の十年間だけの復（課役・雜徭免）を適用するということである。

凡そ外蕃に没落して還えることを得たらば、一年以上ならば復三年、二年以上ならば復四年、三年以上ならば復五年。外蕃の人化に投せらば復十年。其れ家人・奴放されて戸貫に附かば復三年。

遡れば、天武天皇十年（六八一）八月に次のような詔が出されている。

『日本書紀』天武天皇十年（六八一）八月丙子（十一日）条

三韓の諸人に詔して曰く、先の日に、十年の調税を復したまふこと既に訖んぬ。且、加<sup>しかのみならず</sup>以<sup>まうおもふ</sup>、帰<sup>まうけ</sup>化<sup>け</sup>く初めの年に俱に來る子・孫は、並に課役悉く免す。

すなわち、三韓（百濟・高句麗・新羅）の難民型渡来人への十年間の課役免税は終了したが、一緒に渡来した子供が課税の年齢に達しても、親と同じく十年間は免除するということである。この十年間の復が養老令賦役令没落外蕃条及び大宝令での同条に定着しているのであるが、そのことは、この天武十年二月に発布された飛鳥淨御原令の賦役令にも明文されていたのであろう。

靈龜三年（養老元年・七一七）の処置は、三韓のうちとくに本国が滅んでしまった百濟と高句麗からの難民型渡来人の子孫に天武天皇十年以来の賦役令の恩典を拡大して、復を十年から終身に延長したものである。この施策に先だつものが前年の高麗郡の建郡であり、両者は連携する施策であった。靈龜三年の処置は百濟滅亡時をも対象としているが、靈龜三年は天智天皇二年（六六三）の白村江の戦いからすでに五十余年を経ているから、実際問題として当時の百濟からの難民はすでに死亡しているか、健在でも不課の耆（六十六歳以上）あるいは調・庸半免の老（六十一歳以上）に達しているのが殆どであるから、この処置は実質的には高句麗滅亡時の難民を対象としている。

以上、靈龜二年（七一六）の武蔵国高麗郡の建郡については、次のようにまとめられる。

日本型中華思想に基づく国家的な視点により唐・新羅・渤海（震国）を意識したものである。大宝三年（七〇三）に朝鮮半島で高句麗（同王家）が途絶えたのを受けて日本国内に高麗王家が創始されていたが、靈龜年間に至って、東国の民の再配置が行われるなかで、中央政府と高句麗系の武蔵国守の連携の基に、従来より高句麗人が集住していた武蔵国入間郡に東国諸国の高句麗人を移住させて建郡されたのが高麗郡であって、単に武蔵国一国の問題ではない。翌年に、高句麗からの難民型渡来人の課役を終身免除しているのは、その強制移住の見返りの的なもので、その恩典のもとに高麗の地の開墾や技術移入に従事させたのである。

残る問題として高麗王家が存続していないことがあるが、この点は後述する。

### 3、新羅郡建郡をめぐる

次に、天平宝字二年（七五八）八月に高麗郡と同じく武蔵国に建郡された新羅郡（史料Ⅴ）の建郡事情について検討する。新羅郡は、埼玉県和光市・朝霞市・新座市、志木市の大半、戸田市の一部、そして東京都西東京市の一部及び同練馬区大泉を含む地域で、『和名類聚抄』では「尔比久良」と訓み志木・余戸の二郷が載る小郡である。その郡域から判断するに高麗郡同様に入間郡域ないしは同じく荒川西岸の豊嶋郡域を割いたものと考えられる。『続日本紀』では宝龜十一年（七八〇）十一月条に「新羅郡」とあるが、その後『延喜式』には「新座郡」がみえるので、この間に改称された。これは、弘仁十一年（八二〇）二月に遠江・駿河両国に移配した新羅人七百人が反乱を起こし、武蔵・相摸等七国の兵が動員され追討したこと（『日本後紀』・『日本紀略』）、貞観十一年（八六九）六月の新羅の賊の博多への入寇（『日本三代実録』）などを受けて、「新羅」を忌避して改称したものであろう。

さて、先学をみるに、その建郡理由として高麗郡同様に①隔離策、②融和・優遇策、③開発促進策があげられている。

赤熊浩一氏は<sup>(17)</sup>、渡来人の安置を瓦・須恵器・鉄などの生産システムの改革のためのものとする立場から、埼玉県ふじみ野市（旧大井町域）の東台遺跡の鉄生産を武蔵国衙の主導のもとの新羅人の手になるものとし、その論功として新羅郡建郡が認められたとしている。また、照林敏郎氏は<sup>(18)</sup>、新羅郡域は古墳時代以後の遺跡が乏しく、その生産性の低さが『続日本紀』の新羅郡建郡記事の「閑地」に相応しいと指摘している。

宮瀧氏は、新羅郡の建郡事情を高麗郡同様に対唐向けのアピールとするが、高麗郡と同時に建郡されなかった理由を霊龜二年（七一六）段階では、実存している新羅との緊張関係を高めるので、それを回避するため建郡しなかったとしている。

しかし、実際に新羅郡が建郡されたのは、むしろ新羅との緊張関係がピークに達した時期であることに留意したい。この点、注目したいのは、加藤かな子氏が<sup>(19)</sup>、建郡時の武蔵国守は藤原仲麻呂派の高麗福信であるとしたうえで、新羅郡建郡は仲麻呂の新羅征討計画の一環として新羅人を集めて管理したものとしたことである。福信は天平勝宝八年（七五六）六月には山背守であるが（『大日本古文書』四卷一七五頁）、七月には「従四位上紫微少弼兼武蔵守」であり（『同』四卷一七七頁）、天平宝字二年（七五八）八月の新羅郡建郡時点の武蔵国守は福信の遙任であったと考えられる。仲麻呂政権下には福信に限らず、福信の従兄弟らしき高麗大山が造東大寺司次官を経て天平宝字五年（七六一）には武蔵国介のまま遣高麗使（遣渤海使）に任命されるなど、仲麻呂・高麗氏・武蔵国の関係は密であった。

ただし、加藤氏が、仲麻呂の新羅郡建郡を祖父不比等が高麗郡を建郡したのに倣った政権掌握の記念事業と評価するのはいかながなものであろうか<sup>(20)</sup>。あくまでも、当時のさしせまった日羅関係のなかでの建郡と言うことを本義とすべきであろう。

さて、当時の日等関係は【表4】の如くである。新羅郡建郡の前年の天平宝字元年（七五七）には官人の試験に新羅征討法が出題され（『経国集』巻二十策下）、建郡の翌年の天平宝字三年

〈30〉 渡来人（帰化人）の東国移配と高麗郡・新羅郡（荒井）

(七五九)には新羅遠征計画が現実的なものとなっている。この間の新羅郡の建郡も、こうした仲麻呂政権下における日羅間の緊張のなかで行われた施策にはほかならない。すでに滅びてしまった高句麗の難民を集めて建てた高麗郡とは建郡事情が違い、仮想敵国である新羅人を集めて建てた郡が新羅郡であって、それは来たるべき新羅戦争に先だつ処理であった。

本国が滅んだ百済や高句麗の王族は、日本国内に百済王氏や高麗王氏として取り込むことができたが、新羅王家にはそれは及ぶべくもなく、したがって、日本型中華思想の所産である百済郡・高麗郡と新羅郡とは全く性格を異にする。新羅郡の建郡は、戦時体制を前提とする新羅人の隔離的建郡と言わねばならない。『続日本紀』の記事で高麗郡建郡(史料Ⅳ)と新羅郡建郡(史料Ⅴ)とを比較すると、前者は高句麗人を「武蔵国に遷し」、後者は新羅人を「武蔵国の閑地に移す」とある。遷都・遷宮の語があるように「遷」にネガティブな意義はないが、「移」には望ましくない移動を示す要素がある<sup>(21)</sup>。たとえば、殺人犯が恩赦にあった時に遺族の復讐を避けて強制移住させる「移郷」(賊盗律)や、犯罪人や蝦夷を強制移動させる「移配」(獄令)である。なおかつ、「閑地」という表現も、従来の安置して「田と粟を給す」タイプの東国移住とは異なるものであることを示している(表2参照)。

そして、新羅郡建郡の翌年の天平宝字三年(七五九)九月には、新羅からの渡来人を極力帰国させるように大宰府に命じているが(『続日本紀』)、なおも留まった新羅人であろうか、翌年四月には「帰化ける新羅の一百卅一人を武蔵国に置」いている(『同』)。彼らも新羅郡に追加移配されたのであろう。続く天平宝字五年(七六一)正月には、武蔵・美濃国の少年に新羅語を習わせているが(『同』)、これは新羅郡と席田郡の少年達であろう。少年を反間(スパイ)として新羅に送るつもりであったのであろうか。新羅遠征に渡来した新羅人を利用するためにも、新羅人を一箇所に集めて管理したのが、席田郡・新羅郡の建郡ということになる。

新羅郡に関して、「なぜ、建郡されたか」、「なぜ、天平宝字二年であったか」は以上である。では、残る「なぜ、武蔵国であったか」であるが、これは高麗郡同様に考えられる。

すなわち、『続日本紀』の新羅郡建郡の記事(史料Ⅳ)では、新羅僧三十二人・尼二・男十九人・女二十一人を以て建郡されているが、もとよりこの七十四人では郡は構成できない。翌年に百三十一人が加わったとしても同じである。これは、七十四人で新羅郡を建郡したのではなく、新たに渡来、帰化した新羅人七十四人の東国移配を契機として、すでに武蔵国にいた新羅人、あるいはその他東国にいた新羅人をも集めて建郡したものであろう。武蔵国への新羅人の安置は、『日本書紀』では持統天皇元年(六八七)四月癸卯(十日)条に「僧尼及び百姓男女二十二人」、同四年二月壬申(二十五日)条に「韓奈末許等十二人」の例がある。また、『続日本紀』では天平五年(七三三)六月丁酉(二日)条で「埼玉郡新羅人徳師等男女五十三人」に金姓を下賜し、宝亀十一年(七八〇)五月甲戌(十一日)条で「武蔵国新羅郡人沙良真熊等二人」に広岡造姓を賜姓している例がある。武蔵国には新羅郡建郡以前より多くの新羅人の存在があったことは容易に想像されよう。

東国に目を広げれば、『日本書紀』に新羅人の東国安置は、持統天皇元年(六八七)三月、三年四月、四年八月と三回にわたって下野国に安置しているのが目立つ(表2参照)。黒済和彦氏が指摘するように<sup>(22)</sup>、新羅郡建郡に際して下野国からも新羅人が武蔵国へ再配置された可能性が



ある。

【表 4】日羅外交と高麗氏・武蔵国・新羅郡（出典は『続日本紀』ほか）

天平十五年（743）		新羅使を筑前から放還
天平勝宝四年（752）		高麗大山が遣唐使判官として入唐（天平勝宝六年帰国）
天平勝宝五年（753）		唐・長安で遣唐使大伴古麻呂が新羅使者と席次争い 「自古至今、新羅朝貢日本国久矣」（『続日本紀』） 遣新羅使派遣されるも翌年に新羅王に謁見許可されず 「日本国使至。慢而無礼。王不見之。乃廻」（『三国史記』）
天平勝宝八年（756）	六月	怡土城建設開始
天平勝宝八年（756）	七月	従四位上紫微少弼の高麗福信武蔵守現任（『法隆寺献物帳』） 福信の国守時代に武蔵国分寺の造営が進む
天平宝字元年（757）	八月	高麗大山、造東大寺司次官現任（造東大寺司解）
	十一月	官人登用試験に新羅征討が出される（『経国集』巻二十策下）
天平宝字二年（758）	八月	<u>武蔵国に新羅郡が建郡される</u>
天平宝字三年（759）	六月	大宰府に行軍式作成する、新羅遠征計画の具体化
	八月	香椎廟に新羅征討について報告
	九月	新羅からの「帰化」人を極力放還するように大宰府に命じる
	九月	三年以内に新羅遠征用の船500艘の造船計画始まる
天平宝字四年（760）	四月	<u>武蔵国に「帰化」新羅人131人を「置」く→新羅郡へ</u>
天平宝字五年（761）	正月	<u>武蔵・美濃国の少年に新羅語を習わせる</u> （新羅郡と席田郡）
	十月	1日高麗大山が武蔵介となる
		22日高麗大山を遣高麗（渤海）使に任命→新羅征討を相談？
	十一月	船393艘、兵 4 万700人、水夫 1 万7360人の遠征計画発表
天平宝字六年（762）	正月	大宰府で綿襖帋製作、四月に弩師配置
	四月	高麗広山が遣唐副使となる
	六月～	藤原仲麻呂の政治的基盤弱体化 新羅征討計画→無実化
天平宝字七年（763）	八月	南海道節度使停止（旱害）
天平宝字八年（764）	七月	東海道節度使停止
	九月	藤原仲麻呂の乱 →十一月西海道節度使停止

## おわりに

第一節で留保したが、百済王家と違って、高麗王家が若光以後に存続した形跡がないことが、残された問題の一つである。

この点、田中氏は、高句麗の後身である渤海（震国・698～）の出現によって、高句麗が化外に存在するようになったから、日本国内に高麗王家を存続させられなかったとしている。その場合に、抵触するのが、『新撰姓氏録』左京諸蕃下が出自を「高句麗王、好台の七世孫、延典王自り出づ」とする高麗福信の家系である高麗朝臣氏の存在である。高麗王家が継続しない一方で、高句麗王家の系は背奈王家→高麗朝臣家として高麗の名を継いでいる。

すなわち、福信薨伝や『続日本紀』の記事によれば、福信の一族はもとは高句麗の旧王族の消

奴部に由来する肖奈姓であるが、天平十九年（七四七）六月に「正五位下肖奈福信・外正七位下肖奈大山・従八位上肖奈広山等八人」（『続日本紀』）が肖奈王の賜姓を受け、ついで天平勝宝二年（七五〇）正月には「従四位上肖奈王福信等六人」（『同』）が高麗朝臣氏と賜姓され、さらに宝亀十年（七七九）三月に「従三位高麗朝臣福信」に高倉朝臣が賜姓されている。以後、福信とその子の石麻呂及び系譜不詳の殿継が高倉朝臣として史料に現れる。

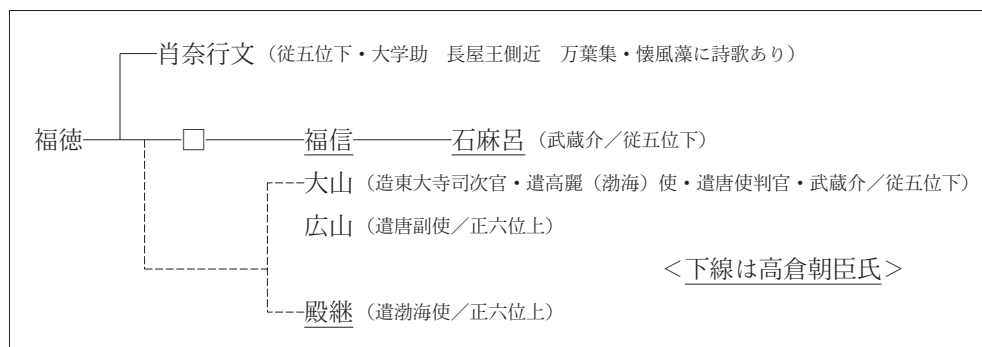
菅澤庸子氏は<sup>(23)</sup>、天平勝宝二年の肖奈王から高麗朝臣氏への改姓を高句麗王族を家臣とすることを唐へアピールしたものとし、宝亀十年の高麗朝臣氏から高倉朝臣氏への改姓を渤海が高句麗の後身であるという意識が薄れたからとしている。しかし、高倉朝臣氏とされたのは福信嫡流ばかりに留まり、高麗朝臣氏はその後も存続したと考えられるし、また高倉朝臣氏への改姓は福信の脱渡来系意識に基づく上疏によるものであって、日本国政府と渤海との関係とは無関係である。

また、田中氏は天平十九年の肖奈から肖奈王への賜姓を、高句麗の後身である渤海に、高句麗系王族が日本の臣下であることを示すことで渤海が日本の下位にあることを示し、それによって、当時国交が途絶えていた新羅に渤海同様であることを示すものとしている。しかし、先に田中氏が渤海の存在ゆえに高麗王家が継続しないとしたことと、この肖奈王家の創造理由は整合性がとれない感がある。

以上のように、若光の高麗王家、福信の背奈王家～高麗朝臣家～高倉朝臣家、『新撰姓氏録』の高麗朝臣家の関係は、若光と福信とが史料的に交差しないことから、定見がないのが現況である。そして、口頭報告ではふれなかったが、加藤謙吉氏の異説がある<sup>(24)</sup>。すなわち、若光が賜姓されたのは「高麗王」姓ではなく「王」姓であるという新説である。また、若光と武蔵国高麗郡は無関係であって、高麗郡の郡司家は福信の兄弟の家系であり、その福信系への背奈王の賜姓は東国経営の一環として高麗郡大領を“貴主”として処遇したものであるとする斬新な理解である。

はたして、若光は高麗王であるのか、高麗郡と関係するのか、高麗王家は存続したのか、そして高麗王家と背奈王家、高麗朝臣家との関係など不明な点が多いが、今後の検討に委ねざるを得ない。

## 【肖奈～高麗朝臣氏の系譜】



本稿は東国の難民型渡来人の一端をみてきたが、最後にふれておきたいことは、先住の倭人や

大化前代以来の古参渡来人と、新たに東国に移配された新参の難民型渡来人との摩擦である。彼ら新たな渡来人は、田租を除く税が十年から終身にわたって免除された。また、防人に指名されることもなかったと思われる。素朴な疑問として、税負担を負う先住者と税負担がない新参渡来人が隣人として、はたしてうまく折り合っていたのであろうか。また、百済人や高句麗人は祖国を滅ぼした新羅人と近接して日常生活を営むことができたのであろうか。高麗郡建郡が難民型渡来人に終生の復を与えた霊亀三年制の前年の霊亀二年（七一六）であることの背景には、東国各地の高句麗人居住地のうち、倭人や新羅人と摩擦が生じている地域の高句麗人をその地から遠ざけるというような目論みも潜在したのではなかろうか。

冒頭でも述べたように、古代日本の渡来人を文化交流や技術伝播などの観点のみで捉えることは失当である。たとえば『播磨国風土記』にみる在地の伊和大神と新羅渡来の天日槍<sup>あめのひばこ</sup>の衝突など、本シンポジウムが明らかにせんとする「地域における人々の流動と土着化」は、なにも全て平和裏に行われたものではなかったと言わねばならない。

#### 【註】

- (1) 荒井秀規「古代相模の「渡来人」と「帰化人」」（『三浦古文化』四八、一九九〇年）。中野高行「「帰化人」という用語の妥当性について」（『日本古代の外交制度史』岩田書院、二〇〇八年。初出は一九九二年）。田中史生「古代の渡来人と戦後「日本」論」（関東学院大学『経済経営研究所年報』二四、二〇〇二年）。李成市「古代史研究と現代性－古代の「帰化人」「渡来人」問題を中心に」（韓国研究者フォーラム第25回報告、二〇一二年。同フォーラム H.P.で公開中）など。近時では、最新版の岩波講座『日本歴史』古代二（岩波書店、二〇一四年）で丸山裕美子「帰化人と古代国家・文化の形成」が「帰化人」の語を使用している。
- (2) 近時、蝦夷の帰化を扱ったものとして、菅澤庸子「平安初期における蝦夷の「帰化」」（『世界人権問題研究センター研究紀要』十八、二〇一三年）がある。
- (3) 『延喜式』主計式下の大帳条に「帰化」は、「不課」とは別に本来は課である「見不輸」の内訳に「口若干帰化」として載る。「見不輸」に併記されるほか従人在役、仕丁、衛士、使蕃、放賤従良、去狹就寛である。これらは年ごとに口数と増減が記録される。
- (4) 中村倉司「渡来人の祀る神社」（『埼玉県立博物館紀要』十九、一九九四年）は、渡来人との関係が指摘されている武蔵国幡羅郡の白髭神社、そのほか高麗郡を中心に式内社でもない白髭神社が多いことを渡来人による非律令的祭祀の痕跡であるとする。
- (5) 高麗郡の郡域は中世以降に東側の入間郡・比企郡方面へ拡大し、明治二九年（一八九六）に郡制施行のため入間郡に編入されて消滅した時点の郡域は、今日の日高市、鶴ヶ島市、川越市（入間川以西）、狭山市（同）、入間市の一部、飯能市の大半である。
- (6) 森公章「古代日本における在日外国人観小考」（『古代日本の対外認識と通交』一九九八年、吉川弘文館、初出は一九九五年）
- (7) 高橋一夫「どうしてこの地に高麗郡が建郡されたの」（高麗浪漫学会編著『早わかり高麗郡入門 Q&A』高麗郡建郡1300年記念事業日高市実行委員会、二〇一三年）
- (8) 加藤かな子「北武蔵の古代氏族と高麗郡設置」（『駒沢史学』三七、一九八七年）
- (9) 田中史生「『王』姓賜与と日本古代国家」（『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書店、一九九七年）。
- (10) 百済王家の成立については、寛敏生「百済王姓の成立と日本古代帝国」（『古代王権と律令国家』校倉書房、二〇〇二年）を参照されたい。

- (11) 宮瀧交二「高麗郡の設置と渡来人」(『名栗の歴史』上、飯能市教育委員会、二〇〇八年)、「古代武蔵国高麗郡をめぐる研究の現状について」(『地域のなかの古代史』岩田書院、二〇〇八年)。
- (12) 相模国では、神奈川県大磯町を中心に若光渡来伝承があり(『箱根山縁起』・『北条記』・『走湯山縁起』・『神道集』)、高麗建郡に際して相模国より武蔵国へ移住したとされる。相模の若光伝承については、『大磯町史』六・通史編(大磯町、二〇〇四年)に記した。
- (13) 『高麗氏系図』は初代若光～現六十代までの高麗神社宮司家の系図であるが、旧本は正元元年(一二五九)に焼失し、現本はその後二十八代永純(十三世紀後半)が一族の旧記を集成して作成したものと現本に記されている。
- (14) 武蔵国で、高麗郡・新羅郡のほか郡郷名から渡来人の居住が推測されているのは、幡羅郡(幡羅郷・上秦郷・下秦郷)、都筑郡の高幡郷・轅屋郷などがある。
- (15) 武蔵国全体の渡来人については、中村倉司「武蔵国における渡来人の軌跡」(『土曜考古』十六、一九九一年)、森田悌「渡来人の入部」(『武蔵の古代史』さいたま出版会、二〇一三年)など参照されたい。
- (16) 天智七年(六六八)の高句麗滅亡時に唐に連行された宝蔵王は、天武六年(六七七)に唐によって遼東州都督・朝鮮王に冊封され遼東に戻ったが、反乱を企て召喚され、天武十一年(六八二)または翌年に死亡している。『三国史記』高句麗本紀は宝蔵王の死を以て高句麗の滅亡とする。
- (17) 赤熊浩一「新羅建郡と古代武蔵国の鉄生産」(『埼玉の考古学』Ⅱ、埼玉考古学会、二〇〇六年)。
- (18) 照林敏郎「旧新座郡内における奈良・平安時代遺跡の様相」(坂詰秀一先生古稀記念会『考古学の諸相』Ⅱ、二〇〇六年)。
- (19) 加藤かな子「武蔵国新羅郡設置に関する一試論 - 仲麻呂政権における渡来人政策を通して - 」(『駒沢大学史学論集』十九、一九八九年)。
- (20) 註15森田氏論考も加藤氏同様に「祖父の業績の一つである高麗郡建郡に倣い、新羅郡を立てたとする通説的理解に立って良い」とする。
- (21) 『続日本紀』天平勝宝二年二月戊辰条の「天皇、大郡宮<sup>よ</sup>従り、薬師寺宮に移<sup>うつりたま</sup>御ふ」などもあり、「移」が全て否定的な移動であるわけではない。
- (22) 黒済和彦「東関東産須恵器の流通」(『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会、二〇〇八年)。
- (23) 菅澤庸子「古代日本における高麗の残像」(『史窓』四七、一九九〇年)。
- (24) 加藤謙吉「高麗若光と高麗福信－高句麗系渡来人と東国－」(金鉉球先生退官記念論文集『東アジアの中の朝日関係史』上巻、J & C、二〇一〇年。韓国語)。